

山の翁伝説もうキング
ハサン一人いれば良い
んじゃね？

22世紀少女

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

(我が契約者よ怯えるな)

俺のカルデアに来たこの方山の翁(以下じいじ)は一人で人理を修復出来るようなお方で？

この物語はあれこれいい居れば良くな？だと思ったところにじいじを出すだけのお話(予定) ネタバレ注意やで

目次

自カルデアののほほんとした小話プロ	
ローグ	1
自カルデアののほほんとした小話プロ	
ローグ2	4
番外編ここに翁居れば秒で終わる6章	
7	
金時とアヴェンジャーとマスターと	
11	

自カルデアのほほんとした小話プロローグ

(怯えるな我が契約者よ)

この声を聞いた時俺は死を感じた、死が服を着て歩いてる様な感覚。

(あ、あのー)俺は声を荒げた、何かしないと殺されると思ったからだ、

(…怯えるなど言っているであろう)

思ったより良い人そうだな、しかし！ここで気を緩めてはまずい！マシユを守らなければ！

(あ、あのー名前を聞いても?)

(我に名はないキングハサンとでも山の翁とでも好きなように呼ぶといい)

なんと！この人が呪腕先生が言っていた初代山の翁か！何か粗相をすると首が飛ぶと

噂の…

(じゃーキングハサン！今度は俺の自己紹介だね！俺の名前は藤丸、どうやら人類最後のマスターだよろしくで良いのかな?)

(藤丸…いい名だ気に入った我が力存分に使うと良い)

どうやら気に入ってくれたようだやっだね！後で呪腕先生に案内役を頼まないとな

！っとその前にマシユに報告しないと、

(マシユくおーいマシユく何処だーい！ん？フォウ君マシユを見なかった？)

(フォウウフォウウ)(ん？ついて来いって？あつ！待つて)

マシユの居場所を知ってから知らずか走り出すフォウ君、結構早い、そして着いた場所
所は

(ドクターの部屋？)

いつのまにか後ろにいたハサンが聞いてきた、

(ここは？契約者よ案内を頼めるか？)

(もちろん！って言いたいところだけど案内は呪腕先生に頼もうかなって)

(呪腕か…まあ、よかろうそれは直ぐに来るのか？)

(いや、マイルームに行つて呼ばないと行けないんだよ。その前にハサンに紹介したい人たちがいるんだ！)

どうやら、了承してくれたみたいだ、ふと疑問に思ったことを聞いてみた。

(ねえ、ハサン？)

(何だ契約者よ)

(ハサンって一番偉い山の翁なんでしょ？他の例えば静謐ハサンとかって呼んだら来るの？)

(：どうであろうな、呼んでみるか?)

とても気になると言うかこれで来たら召喚した時から気付いていたのかな?

(すごく気になる!呼んでみてよ!)

(よかろう、静謐の呪腕の百貌の集え)

シユタタタ、何処からか三人が集まった流石アサシン、全く分からなかった

(（およびでしようか）)

3人が息ピッタリに、喋ってたすげえ、そこまで怖い人なのか…

(これで良いか?契約者よ)

(あつ!うんありがとう、そうそう3人集まったならみんなでハサンにカルデアを案内

してあげてくれないk)

つと、言葉の途中で

(マスター様…私達この後種火集めが…)

と、静謐ちゃんが答えてくれた可愛い、

(そっかー残念だけど俺が命令した事だししょうがないハサン、俺が案内するよ)

と言うとハサンは無言で頷き付いてきた。

自カルデアののほほんとした小話プロローグ2

俺はハサンをDr. ロマンとダヴィンチちゃんの元へ連れて行っていた

(所でハサン? 貴方ってサーヴァントなの? 話を聞くと生きてるか死んでいるか分からないだけ?)

(…契約者よ、契約していると言うことは私は使い魔という事では無いのかね?)

ああ! 確かに! そうだ、っと思ったところでロマンとダヴィンチちゃんの部屋に着いた

(…ここだよハサンここが俺の上司笑が居るところだよ!)

(…ふむ、面白いな、はははっ! 非常に面白い! 契約者よ、

我はここが気に入った契約者の役目が終わるまでは尽力尽くすことを誓おう、我が山の翁の名に誓って。)

わお、急にハサンが、乗り気になってくれたなんてだろう? まあ、良いかやる気になって来れるのは非常に良い事だろう。

(何がそんなに面白かったの? ハサンとはさつき出会ってばかりだけどそんなに笑うような鯖じゃ無いと思うんだけど?)

山の翁く side く

どうやら、この中にいる奴はまだ秘密を我が契約者には話して居ないようだな。隠す必要は…あるな今正体を明かすと、取り返しがつかないだろうな、やはりただのあほう、では無いか…つくづく面白い、我はとても楽しげな場所に来たようだ。あまり運は良く無いのだがなふつ…

(我が契約者いや、これからは藤丸と呼ばせてもらう良いだろう？我は楽しみだ汝が、どのようなになるか最も近い場所で見せてもらうぞ？ははは)

藤丸く side く

(俺がどうなるか、か…俺はどうにもならないよ、俺が出来る精一杯をするだけさ！さっ！入ろう！ハサン…いや！翁！)

そこから俺たちの冒険が始まったいや、再スタートと言うべきか翁は強かったためちやくちや強かったでも時々手を抜いて俺に試練を与えて来る意地悪な人だった、勿論それが俺とマシユを育てる為のものだって分かってた、意味もなくそんな事をする訳ない、実際危なくなつた時はすぐに助けに来てくれた、助けが無ければ死んでいた時だつてあつた、それほどこの人理修復の旅は過酷だつた、しかし終わってみれば凄く…いや、とても短いものだった、こうして翁が来てから書いてた日記も終わりを迎える。もうすぐ新年を迎える2016年…とても短いようで、長く、短い、

この旅は我々人類の勝利で終わりを迎えた、

(ねえ…翁…終わったんだよね？俺たちの旅もう終わって良いんだよね？)

(…ああ…そうだ、遂に終わったのだ、見よ藤丸よ、この景色綺麗であろう？汝が苦勞して努力して涙した結果だ、よく頑張ったな。汝を最初に見た時は酷く驚いたものだ、はははっ。)

(ふふっ、そんなに笑う事無いじゃないか翁、でも今はふふっ、俺もははっ、笑いが止まらないよ…)

(泣いているでは無いか…ふむ、我は対処の仕方が分からないな、マシユ！観ているのであろう？)

(はっ、はい！マシユ・キリエライト全部見て居ました！)

(マシユ…大丈夫なのかい…？君はだつて…)

(大丈夫ですよ、先輩もう、デミサヴァーントの力は余り残って居ませんが、ふふっ、それでも私はここに居ますここで動いてます、せ、先輩のお隣に居ます！だから泣かないで下さいね？)

こうして俺の旅は終わった、この日記を書き終わったら一旦実家に帰ろうと思つていまず、気分転換に帰るのも悪く無いよね！

番外編ここに翁居れば秒で終わる6章

やはりか、こやつ太陽が出てない時はそこまで……いや強いのであろうが太陽が出てい
る時に比べると酷く見劣りする

だか、こやつ的心情は分かる、必死なのだ自分の王を守るためなら、自分の命などい
らないと思っているそんな目をしている、しかし、それではならぬのだ……自分の命を投
げだして戦うそれでは王の命は守れても王の命は守れない

それに気付かない様では藤丸に合わす価値は無い、

その時我が鐘我が剣を振おう。

ガヴェイン side

くつ！この方はずともお強い、太陽が有る無し関係なく勝てる気がしない、私は自惚
れていた！王から貰ったギフトこれさえあれば負けるはずはないと、高を括っていた！
相手は太陽王、太陽がある限り私に負けはないと思つて居た！しかし！なんだ、この
体たらくは！体がひどく重い

自分の体じゃ無いみたいだ……トリスタン卿はどうだろうか……アグラヴェイン卿は胃
を痛めては無いだろうか……

ああ、ダメだ私が死ぬかとのことしか考えられてない

今の最善を考えろ、私がこの方に勝つのは不可能、しかし

宝具さえ打てれば、私が、我が王の元に行けるまでの時間は、稼げるであろう！しかし、太陽が砂嵐でこうやって居ては…くそ！

山の翁くsideく

…そろそろか…ほう、面構えが変わったな命を捨てるのでは無く捧げる事にしたか、よかろう、こやつを見れば藤丸も一段階成長できるのであろう…

(私の仕事今ここに救済したり、私の鐘、汝に鐘は鳴らずならば我はここから去るのみ)

ガヴェインくsideく

何だ!?急に砂嵐と一緒に死の化身が消えた?何処へ…?

ハッ!我が王よ!今貴方の元へ!

藤丸くsideく

(翁はちゃんと足止めしてくれてるかな?)

(どうでしょう?時々私たちに意地悪をするお方ですから)

ぷくうーと膨れたマッシュが可愛い、翁が居たら敵地で緊張感のない行動だな…、とか言われて怒られてそうだけど

流石にあの、ガヴェインをけしかけて来るわけ…

ガヴエインく side へ

我が王……あれは、カルデアのマスター？何故ここに？

まさか!?! トリスタン卿を……いや、見てみればお供が一人しか居ないようだなるほどハサン達が卿を止めているのか

ならば私が！ここで！止めるまで！

(カルデアのマスターよ……これ以上は進ませない！)

藤丸く side へ

まじかあ……じいじ、まじかあ……勝てるのかな？

いや、ギフトが無いと考えたら……それにしたつて……

時々、いや、常に翁が何考えてるか分からないなあ……結果的には俺達は強くなるんだけど流石にこれは……勝てないんじゃないや？

(……すまない契約者よ、よく考えたら汝らの近くには味方が居ないのであつたな……だが、よく見よこやつ目の目を心を

分かるか?)

(心は分かんないけど、目を見れば分かる王様を護る目だ、

王様の事だけを考えてる目だしかも自分の命を捨てるじゃなくて捧げる目をしてる一番大変な相手だよ? 翁?)

(そこまで分かれば良からう…がヴエイン、と言ったな

我が鐘汝を示した、ならば我が剣、汝に振るおう、我に宝具はないこの剣が宝具この一振りで汝の首をいたたくとしよう！死告天使！)

たった、一振り剣を振っただけ、それだけなのに、あの、ガヴエインを倒した、やっぱり翁は、強い、だからこそ

力を借りるのは、必要最低限にしないといけない、翁に甘えるのは、これで最後にしよう！

(さあ！マシユ！行くよ！聖王の元へ！)

(はいっ！先輩！)

金時とアヴェンジャーとマスターと

(おーい、大将、大将は何処だあ?)

(あつ、金時どうしたの? そんなに大声で?)

(おつ、大将ここに居たのかい、随分と探したんだぜ?)

(それは、ごめんね、種火周回に行つてたんだ、それで?)

どうしたの?)

(ああ、ちよつと前にウルフがここに、来てたる? それで

俺つちの動物会話で話してたんだが、どうやら大将のこと

かなり気に入つてゐたいなんだよ。それで、どうやら

大将に、したい事があるみたいなんだよ。)

? なんだらう、したい事: うーん? 何だらう、まあ取り敢えず、アヴェンジャーの所に行こうか。

(分かつたよ金時、行こうか! 勿論付いてきてくれるよね?)

(勿論さ大将、俺つちが、居ないと会話出来ないだらう? 任せときな!)

流石、金時頼りになるな、誕生日に焼肉を奢つてくれたし、小太郎が、惚れるのもよ

く分かるなあ。

(着いたぜ大将ここが、ウルフの部屋だぜ。毛づくろいでもしてんじやねーかな?)
(ん、ありがとう。金時、さあ、入ろうか! 一体何してくれるんだろうね?)

ウイン、扉が開いたそこには、とても大きな狼か毛づくろいをし、首の無い人がその毛を拾って居た。

(ワオーンワン、ワオーンガウ)

(うんうん、なるほどな、大将この犬ところは大将を、背中に乗せて、草原を駆け抜けた
いようだぜ? 良かったじやねーか! 大将! 無茶苦茶好かれてんじやーねか! ははっ、相
談の必要無かったなあ? 大将!)

(き、金時! 内緒! 言わないでよ! でも、そつか。俺を背中に乗せて草原走りたいか…ダ
ヴィンチちゃんに頼んだら、草原に行けるかな?)

(何言ってるんだ、大将、内緒で行くに決まってる? 頼光の大将にバレたらかなり不味
そうだけど…レイシフトは現状禁止なんだろ? だったら、内緒で行くしか無いだろ?)

(き、金時…そうだね! バレたら金時! 一緒に怒られよう!)

(ウーワンワン! ワオーン)

(ははっ、そうだね! アヴェンジャーも一緒だね!)

(それじゃ、大将、俺たちはライダーにクラスチェンジして来るぜ! 俺たちのゴールデン

ベヤー号も、久しぶりに走らせてやらねーとな！エンジン全開だぜ！)

金時はかなり上機嫌だ、それもそうか、乗れる場所なんて無かったからね。

(分かったよそれじゃ…首無しさんは、僕を落とさないように掴んでてくれる？うん、ありがとう、それじゃ、先に準備しようか。)

時間も遅くなり、みんな眠っている深夜一時俺とアヴェエンジャーと金時は準備万端だった。

(ところで、大将ボタンは誰が押すんだい？え？イビルウインドウ、なるほど確かに、大将、流石！頭いいな！)

(へへっ、小太郎なら誰にも言わないと思ってね、おーい！)

小太郎準備オツケーだよ！ボタンを押して！)

それを伝えると、レイシフトが、始まった。

目を開けるとそこは見渡す限りの草原、ここでピクニックしたいなあ…そんな事を思っていたら。

(大将…ここは…いい所だ…いい風だな！俺たちもう我慢できねえ！先に行かせてもらうぜ！)

言った瞬間、金時は走り去って居た。

(ははっ、俺たちも行こうか？乗っても良いのかい？ヘシアン・ロボ？)

(ワン！ワオン！)

乗れと言っているようだ。

ヘシアン・ロボくsideく

この前とても良いものを、貰ったからな、そのお返しだ

ふっ：マスターは気に入ってくれるだろうか？そんな事を考えるようになったとは、丸くなったものだ、まあ、たまには良いだろう：あの金髪の坊主が言うように、ここは風が気持ちいい、我も久し振りに本気で走るとするか：